島根大学法文学部紀要　文学科編　第24号　(1995.12)

注解『七十一番職人歌合』稿（十六）

下房俊一

凡例

一、本稿には、『七十一番職人歌合』の中、第三十五番および第三十六番の注解を収めた。

三十五番　米売　豆売

【職人尽】

〔飛鳥井雅康　職人歌〕十一番左　神子

恋せしと神の御前にぬかつきてさむくのこめの打はらふ哉

〔吾吟我集〕寄米恋　うす情契りをこめのつきはててこぬかこぬかと待つほどぞ憂き　〔古今夷曲集〕米問屋　我が宿の米の立直（たてね）やよかるらん思ひの外に客が来ませる＜初知＞　〔後撰夷曲集〕米屋　下帯のさがりし米を買ふ人は肌ゆるさずにまはしよくせよ＜高故＞　〔大団〕寄米恋　秋の田のほの字と見つつなびかぬはいかにつれなきよね衆なるらん　〔人倫訓蒙図彙〕米屋　米は諸国より大津大坂につくを分散して京につける。加賀をもつて上とす。大豆（まめ）、小豆、一切の五穀、大宮通にあり。〔春駒狂歌集〕赤小豆によする恋　大納言とのゐの夕見そめては赤の御膳の味も覚えず　〔誹諧職人尽〕米売　年たつや新米ふくべ米五升＜はせを＞　北浜の市は崩れて雲の峰＜万珠＞　石町を米売り歩行く弥生かな＜文瞳＞　米売や外はあさがほの

花ざかり〈五啓〉　年を経る天秤棒や今年米〈一壷〉　米売の道や一筋今朝の雪〈釵尺〉　新米や舟まで隣る美濃近江〈尺子〉　雪の夜や迷子も米のはかりごと〈寥和〉　／　豆売　節分やつねは小豆を売りながら〈谷水〉　舛と我がとしの豆売る翁かな〈輝雄〉　さみだれの空豆売や待乳山〈潜魚〉　豆売や十夜は鬼の敵持ち〈水戸　沾璃〉　豆売に音を負くるな玉霰〈友松〉　豆売の軽々しさよ年の関〈達平〉　新大豆もしやが父に似ぬ俵かな〈寥和〉　〔江戸職人歌合〕五番左　青物売　名に高き葉月のもちは茹で豆のさやにぞみつる夜半の月影　左右共無二申旨一。判云、左の歌、姿よろしく侍るべし。されど、世上に八月を芋の名月と言ひ習はし侍るにや。豆をしも詠まれたる、思ひかけずや。右は、……可レ為レ勝。　市毎に何首烏自然薯蕷数はあれど我が恋ふいもの影をだに見ず　右申旨なし。……判云、……自然薯蕷、何首烏は侍るとも、なほ夕河岸の鯵（右歌）なん、味勝りては侍りける　〔宝船桂帆柱〕米屋　新米の俵の色の青々と杉形（すぎなり）に積む見世のにぎはひ　「まはしがしつかりじやア、値打ちがちつとむづかしい」　〔難波職人歌合〕上十六番左　米屋　立つをよし寝（ぬ）るを忌むてふ米（よね）はかる詞は月の夜半もいはまし　右の方人云、月夜に寝ることを忌むとある外は、何事をいへりや。うるま人のいふらむやうにて、心も詞もむげに分き難し。左方答、上手のはかる米は、升の内に立ちて入る事少なく、下手なれば伏して多く入る。これを米はかるものの詞とはいふなり。されば、月の為にはあひにあひて、ふさはしき詞ぞとは云へるなり。判に云、左の歌、さる細かなることまでを月の為に思ひ寄られたる、心浅からずと云ふべし。……左の勝といふべくこそ。

【本文】

卅五番

山かけや木のしたやみのくろこめの
月いてゝこそしらけそめけれ
まめかくるさはりもいとゝまさるかな
せとの高木の葉かくれの月

左右ともに、歌さまも作者のしなに

山かけ―〔類〕山陰　木のしたやみ―〔類〕木の下やみ　くろこめ―〔類〕くろ米
いてゝ―〔類〕出て　しらけそめけれ―〔類〕しらけ初けれ
かな―〔類〕哉
ともに―〔類〕共に　歌さま―〔忠〕哥さま〔類〕歌様　しな―〔類〕

似たり。可為持。

恋せしと神のみまへにぬかつきて
さんくのこめのうちはらふかな
こひすれはやせ地のまめのさるなかせ
なみたの川はわれそましける
　さむくのこめのぬか、さるなかせ、ましなと、
へつらへるさま、うるはしきすかたならす。
猶持にや。

◇　◇

こめうり
なをこめは候。
けさの市には
あひ候へく
候。

まめうり
われらかまめも、
いまたあきなひ
をそく候
そ。

品

みまへ―〔類〕御前
こめ―〔類〕米　うちはらふ―〔類〕打はらふ　かな―〔明〕〔類〕哉
やせ地―〔類〕やせち
なみた―〔類〕涙　われそ―〔類〕我そ

こめうり―〔白〕〔類〕米売〔忠〕卅五番　米売
なを―〔白〕な〔忠〕な。を

まめうり―〔白〕〔忠〕〔類〕まめ売
まめ―〔白〕〔忠〕大豆
あきなひ―〔白〕〔忠〕商
をそく―〔白〕〔忠〕おそく

【語注】

◎米売、豆売ともに、職人歌合に初出。

◎**木のしたやみのくろこめ**　「木の下闇の黒」から「黒米」と続く。「黒米」は玄米。

◎**月いてゝこそしらけそめけれ**　「月出で」に「搗き出で」を掛け、白くなる意の「白く」に、精米する意の「しらぐ」を掛ける。黒米を搗いて精米するように、木の下闇が、月が出て明るくなった、というのである。

◎**まめかくるさはりもいとゝまさるかな**　「豆掛く」は、刈り入れた枝つきの豆を、木などに掛けて乾燥させること。ここは、高木に豆を掛けるので、ますます月の妨げとなる、というのである。「増さる」に「真猿」を掛けるか。「豆」と「猿」との関係については、後世のものだが、『毛吹草』三（付合）の「大豆」の項に「猿」、『類船集』の「菽」の項に「猿」などとある。なお、豆売の恋の歌にも、「猿なかせ」、「猿」の語が用いられている。

◎**せとの高木の葉かくれの月**　家の裏の高木の葉に隠れている月。

◎**歌さまも作者のしなに似たり**　「品」は、職人としての身分、地位または品性。ここは、悪い意味で、歌ざまが、米売や豆売に相応して賤しい、というのであろう。

◎**恋せしと……**　『飛鳥井雅康　職人歌』の神子の歌に同じ。もと神子の歌として作られたものを、「米」の縁で、米売の歌に転用したのであろう。

◎**恋せしと**　「恋せじと」で、恋い慕うまいと。すなわち、苦しい恋の思いから逃れたいと。恋の思いを断つために神に祈るという歌は、「恋せじとみたらし河にせし禊神は受けずぞなりにけらしも〈読人不知〉」（古今集、十一、恋一、伊勢物語六十五段に、下句「神は受けずもなりにけるかな」）を始め、数少なくない。

◎**ぬかつきて**　「額づきて」に「糠付きて」を掛ける。

◎**さんく**　「散供」は、米、銭、花などを、供え物として神仏の前に撒き散らすこと。また、その米、銭、花など。禍や穢れを祓い、幸いを招く呪術として行うことがある。

◎**うちはらふ**　「打ち祓ふ」は、散供の米を打ち撒いて祓うこと。それに「打ち払ふ」を掛ける。「打ち払ふ」は、

先の「糠付きて」と照応し、付いた糠を払い落とす意。

◎**こひすれはやせ地**　「恋すれば痩せ」から「痩せ地」と続く。

◎**やせ地のまめのさるなかせ**　痩せ地の豆は育ちが悪く猿さえも喜ばない、という意味の「痩せ地の豆の猿泣かせ」という諺があったかと思われる。ただし、『日本国語大辞典』によれば、静岡県や香川県木田郡で、豆柿のことを「さるなかせ」と言い、また、徳島県の一部で「さるなかし」、神奈川・愛媛両県の一部で「さるなき」と言う、という（「さるなかせ」の項）。ここの「猿泣かせ」も豆柿のこととすれば、豆のように実のなることから、「豆の－猿泣かせ」と続けたか。または、全く別に、「猿泣かせ」と称する豆があったか。「泣かせ」に、恋の思いに泣く意を掛け、下句の「涙の川……」に続く。

◎**なみたの川はわれそましける**　「涙の川（涙川）」は、伝統的な歌にしばしば用いられる比喩。「ましける」は、「まされる」とするのが自然で、意味も通じやすいが、「猿」を掛けるために、あえて無理な表現を選んだのであろう。涙の川は私の方が水嵩が高い。相手の恋人と較べてのことと考えられなくもないが、ここは、滑稽味をねらって、「猿泣かせ」に泣かせられる猿と較べて、の意味を込めたものであろう。

◎**さむくのこめのぬか、さるなかせ、ましなど、へつらへるさま、うるはしきすかたならす**　「へつらふ」は、一般的には、追従する意だが、ここでは、八雲口伝「歌のすがたの事」に、「歌を読みいだして、姿ことがらを見むと思はば、古き歌に詠じ較べて見るべし。いかにもことがらの抜け上がりて、清らかに聞こゆるはよきなり。へつらひてきたなげに、やすくとほりぬべき中の道をばよき捨てて、あなたこなたへつたはむとしたるはわろき也。それを難じて、浮風・初雲、浮雲・初風にてこそあるべきを、か様によみたがるよし、先達申さるめり。心の珍しきをば構へいださぬままに、ゆゆしき事を案じいだしたりと。かやうのすずろなるひが事を続くる、更に更に詮なきことなり。これゆゑ歌はわろくなるなり」とあるごとく、ことさら技巧を弄することをいうのであろう。「散供の米」からの連想で「額づく」、「猿」からの連想で「増し」という語を用いた点が、わざとらしくてよくない、というのであろう。

◎**なをこめは候**　「なを」は、白石本は「な」。誤脱であろう。忠寄本も同様であるが、「な」の下に「を」を補う。

「候」は、「ゾウロウ」ないし「ゾウロ」、または「ゾウ」のように、濁音で読むべきであろう。「〜は候」は、余情を含めて言う場合や問を表す場合などに用いる（十三番語注「あふきは候」の項参照）。右の豆売に対して、「まだ米が余っている」と嘆きを込めて話しかけたのか。あるいは、客に対して、「もっと米はいかがです」と問いかけたのか。

◎けさの市にはあひ候へく候　右の豆売に対して言った言葉か。「あふ」は、割に合う意か。時代が下るが、『炭俵』下に、「よいやうに我が手に占を置いてみる／しやうじんたればあはぬ商ひ〈桃隣〉」、『心中刃は氷の朔日』上に、「是れはあはぬ細工、わしが聞けば請け取るまいに」などの例がある。売れ行きが思わしくないが、今朝の市の売上全体としては、何とか損をしない程度であろう、というのか。『新大系』は、「今朝の市には間に合っています（品切れにならない）」と解する。「候べく候」は、女性の手紙文に多く用いる言葉であるが、ここのように、話し言葉でも用いられることがあったのであろう。本職人歌合では、他に、五十九番左、苧売の言葉に、「近きほどに、又苧舟通り候べく候」とあり、白石本、忠寄本では、三十三番左、紅解の言葉に、「かた紅候べく候」とある。ちなみに、米売、紅解は女であるが、苧売は男。

◎われらかまめも、いまたあきなひをそく候そ　「われら」は、単数の自称代名詞。「商ひ遅い」という言い方は管見に入らぬが、売れ行きがはかばかしくないことをいうのであろう。

【絵】

米売は、桂巻をし小袖を着、左脇の米俵に凭れかかる。前の筵の上に米を広げ、升と斗掻を置く。筵の左に米を入れた布袋。

豆売は、頭巾様のものを被り小袖を着、米売の方を向いて指をさし、話しかけている様子。前の筵の上に大豆らしい豆を広げ、升と斗掻を置く。左に豆を入れた布袋。

三十六番　いたか　ゑた

【職人尽】

〔訓蒙図彙〕屠者（としゃ）　ゑとり、俗云ゑた、屠児（とじ）同。　〔誹諧職人尽〕いたか　驚くや門もてありく施餓鬼棚〈荷兮〉　瓜李罪の有なし水施餓鬼〈京　順也〉　報謝せんそこにもいたか盆の月〈万旭〉　仏にもならぬ響きや辻施餓鬼〈寥和〉　／　穢多穢多ならで狐皮はる少かな〈宗鑑〉　夜こそ聞け穢多が太鼓ほととぎす〈キ角〉　神の代を知らずや時の花見たち〈白雲〉明け行くや妙法蓮華ゑたが池〈故一〉　虫干に信者這入るや穢多が門〈葉五〉　我が犬に穢多と知られそ皐月闇〈群牛〉　太鼓張る門辺に清し梅の花〈寥和〉　〔職人尽狂歌合〕右　穢多　雪沓になるてふ皮をはぐゑたも降り積む庭ははかで詠めん　……右、沓といふに、むかへて、はかでなど申されし首尾おかしく、勝るべくや。　／　右　穢多　もとめつつ鴨の毛を引く手料理に鰒の皮はぐゑたの雪の日　……右、毛を引き皮をはぐさま、よく思ひ寄せられたり。勝るべくや。　／　左　ゑた　牛馬を打ち捨ておきて雪の日はまた虎鰒の皮をこそむけ　左、牛馬にむかへて虎河豚と申されし、いみじく興深く侍り。……ふぐのあつ物、味はひすぐれて侍れば、判者は左に食指をさして侍る。　〔江戸職人歌合〕十一番左　穢多　月影に一皮かかる浮雲を剥ぎ取る業のなどなかる覧　左右とも無二申旨一。判云、左哥、剥ぎ取る業のと侍るあたり、詞優ならずや侍らん。右……尤も勝つべし。　暁の別れも知らで悔しくも時の大鼓を我が張りにけむ　左右無二申旨一。判云、時の大鼓は、掛けまくも畏き御あたりの事なり。憚りあるべし。右為レ勝。　〔略画職人尽〕鳥の名も刀の霜に散る紅葉えたのみ店につるす鹿の角

【本文】

卅六番

文字はよし見えもみえすもよるめくる

見えも―〔類〕みえも

注解『七十一番職人歌合』稿（十六）

いたかの経の月のそらよみ
ひとなから如是ちくしやうそ馬牛の
かはらのものゝ月みてもなそ
　左、いたかの経のやうに空よみとこそ
　いへ、これは経の月とつゝけたり。よらすや
　侍らむ。右、馬牛のかはら、ことによろし。可勝也。
いかにせむ五條のはしのしたむせひ
はてはなみたのなかれかんちやう
しのひつまたゝすむよひのかとの犬
ゑたにはかれの人をとかむる
　猶右勝侍へし。

◇

◇

いたか
なかれかん
ちやう、
なかさせ給へ。
そとはと申は
大日如来の
さまやきやう。

ゑた

そらよみ—〔類〕そら読
ひと—〔類〕人　如是ちくしやう—〔類〕如是畜生

これ—〔類〕是
也—〔類〕なり
はし—〔類〕橋　したむせひ—〔類〕下むせひ
なみた—〔類〕涙　なかれかんちやう—〔類〕流くわん頂
しのひつま—〔類〕忍ひ妻　かと—〔類〕門
ゑたにはかれの—〔明〕ゑたにわかれの〔類〕えたに別の

いたか—〔忠〕卅六番いたか
なかれかんちやう—〔類〕なかれくわんちやう

給へ—〔白〕〔忠〕〔類〕たまへ
そとは—〔白〕〔忠〕卒都婆

さまやきやう—〔明〕三摩耶形（さまやきやう）〔類〕三摩耶形

ゑた—〔白〕〔忠〕〔類〕穢多

このかはは
大まいかな。

このかはは｜〔白〕〔忠〕此かわは〔類〕このかはゝ

【語注】

◎いたかは、「異高」（自戒集）、「居鷹」（伊京集）、「依他家」（天正本節用集）などの字を宛てるが、語義未詳。『嬉遊笑覧』十一に、「経木を卒都婆の形に刻み文字かくなれば、板書の略にや」とあり、後世、その説を引くものが多いが、信じがたい。『改訂綜合日本民俗語彙』は、東北地方の巫女「いたこ」と関係があろうとする（「イタコ」の項）。死者の供養などを行った下級の僧であったらしい。本職人歌合の歌や絵、絵の中の言葉によれば、大日如来を奉じ、夜巡り歩いて経を暗誦し、五条河原で卒塔婆を流して流灌頂を行ったようである。

ゑたは、「餌取（ゑとり）」の転訛とする説が有力であるが、『下学集』や一休の『自戒集』に「穢多」の字が見えるなど、室町時代中頃にはこの字を宛てることが一般化していたらしい。非課税地である河原などに住み、清め、皮剥ぎ、土木、築庭などを業とした者。

◎**文字はよし見えもみえすも**　文字はたとえ見えても見えなくても。ただし、「見え」、「見えず」は、字を識っているかいないかをいうのであろう。いたかは、卒塔婆に書く特定の文字以外、字を識らなかったのであろう。

◎**よるめくる**　いたかは夜巡り歩いて経を読んだのであろう。後世の例であるが、「高野の上の小田原の花／夜めぐるいたかの袖に春の霜〈挙白〉」（多礼が家、一）の付合がある。「夜巡る」は月の縁語。

◎**いたかの経の月のそらよみ**　「経」は、唱門師の唱えた毘沙門経の類であろうか。「空読み」は暗誦すること。「空」に、「月」の縁語で天空の意の「空」を掛ける。また、判詞の「いたかの経のやうに空読みとこそいへ」からすれば、「いたかの経の空読み」という諺の類があったかと思われる。

◎**如是ちくしやう**　「如是」は、正しくは「汝是」。「汝是畜生」は、『梵網経』下の「汝是畜生発菩提心」から出た言葉で、本来は、「汝は畜生であるが（菩提心を発せよ）」の意であるが、ここでは、単に「畜生」というのを、勿体

ぶって仏語めかしたまでと見てよかろう。

◎**馬牛のかはらのもの**　「畜生」から「馬牛」を連想し、「馬牛の皮」から「河原の者」と続く。「河原の者」は、河原の住民の意であるが、『下学集』に、「穢多（エタ）屠児也、河原者（カハラモノ）」とあり、当時、「ゑた」と同義で用いられていたらしい。

◎**月みてもなそ**　月を見てもなぜ。下に、「心が慰まないのか」といった意味の言葉が略されているのであろう。ただし、「なぞ」で終わる歌は管見に入らない。

◎**これは経の月とつゝけたり。よらすや侍らむ**　「寄る」は、縁語、掛詞などによって、言葉と言葉が関連すること。「いたかの経」と「月」とは直接関係がないから、「いたかの経の月」という続け方は不自然だ、というのである。

◎**五條のはしのしたむせひ**　「五條」は今の松原通り、「五條の橋」は松原橋に相当する。室町時代後期には、この辺りに中島があり、唱門師、河原者などの活動の拠点となっていた、という（瀬田勝哉「失われた五条橋中島」〈同『洛中洛外の群像』一九九四年所収〉）。また、『日本職人辞典』に、「高津氏蔵洛中洛外図には、五条橋（？）の両詰に各一か所、河中へ円く矢来を囲み出し、その中に堂がある。これは、いたかが流潅頂用に設けた会場で、一時的に日を限って行うのでなく、かなり継続的に使用したものらしい様子である」（「いたか」の項）とある。「五條の橋の下」から「下嘘び」と続く。「下嘘び」は、人知れず嘘び泣くこと。「たきもののくゆるけぶりの下むせびわれひとりとや身をこがすらん〈為家〉」（新撰六帖、五）などの例がある。

◎**はてはなみたのなかれかんちやう**　「果ては涙の流れ」から「流潅頂」と続く。「流潅頂」は、卒塔婆（後述）や檀の花を川や海に流して、死者を回向すること。『壒嚢鈔』十・五に、「ナガレカンヂヤウトハ何ソ。カント云ハ誤リ也。流潅頂ナルヘシ。……今其ノ体ヲ見ニ、率都婆（ソトバ）ヲ連ネ、檀ノ花ヲ貫キ流ス歟。此水ニ触レン鱗、若ハ无縁ノ死骸、白骨等、必ス得脱ノ縁ト成ルヘシ」とある。なお、四十一番右、蔵回の恋の歌に、「たえず涙の流れ物とて」と、似た表現がある。

◎**しのひつま**　「忍びづま（夫・妻）」は、人目を忍んで契る相手。和歌では、「忍びづま帰るなごりの移り香を袖にあらそふ窓の梅が枝〈兼宗〉」（玉葉集、十四、雑歌一）、「忍びづま来まさぬものをうぐひすのひとくひとくとなに

か語らふ〈隆季〉」（月詣和歌集、六、恋下）のように、男についていうことが多い。ここも、忍び夫である男であろう。

◎**かとの犬**　門の番犬。

◎**ゑたにはかれの人をとかむる**　門の犬が、穢多に剥がれるかのように、人（忍び夫）を咎めて、吠えたてる、というのであろうか。意味が通じにくい。「はかれ」は、明暦板本は「わかれ」、類従本は「別」。

◎**なかれかんちやう、なかさせ給へ**　流灌頂を勧める言葉。

◎**そとはと申は大日如来のさまやきやう**　いたかの唱え言であろう。「卒塔婆」は、仏舎利を納めたり、供養、報恩のために建てる塔。また、それをかたどった細長い板で、死者の供養のために、梵字や経文などを書いたもの。いたかは、絵に見るような小卒塔婆を川に流して、流灌頂を行ったようである。大日如来は、真言密教の本尊。「さまやぎやう」は「三摩耶形」で、「さんまやぎやう」ともいう。仏語で、仏、菩薩などの誓願を象徴する器杖や印契のこと。

◎**大まい**　「大枚（たいまい・だいまい）で、形の大きいことであろう。

【絵】

いたかは、塗り笠を被り覆面をし、僧衣様のものを着て足袋を履く。右手に小卒塔婆を掲げ持つ。前に、樒の枝、小卒塔婆四本。右に、矢立。白石本、忠寄本は、四本の小卒塔婆の位置を異にする。なお、笠を被り覆面をし僧衣を着る者には、他に、十六番右、弦売、二十一番左、草履作、二十四番右、煎じ物売がある。

ゑたは、無帽で髪を束ね、諸肌脱ぎで、右手に木槌を持ち、前に広げた獣皮をなめしている。皮は釘様のもので周囲を留めてある。